

講 座

史  
學  
研  
究  
法  
(三)

エルンスト・ベルンハイム  
小林 秀雄 譯

紀元十六世紀以來エウロツバに起つた人間思想上の變化と觀察方法の變化とに伴うて、漸く發展史觀の構成に必要な準備が成立した。正則な世界の交通、人道主義及び革命等の重大な運動がこの觀察の範圍を擴め、其方法を深遠なるものたらしめた。民族及び其文化の相違、民族性質に及ぼす自然的及び社會的影響が注目され、熱心な古代研究によつて全く違つた時代及び文化の精神に入り込んで、之を握らねばならないことが判明し、古典的古代と中世時代の差異が明白にされて歴史の經過の間に生じた時代の非常な變遷が認められ、教會制度、宗教及び國家組織の起源及び發展を相互の比較によりて研究し、以てその種々なる形體を理解することが努力され、人類の種々な動作の間の影響及び關係が注目され、歸納的研究は進歩して來た哲學、科學の地平線をして益々廣い方面に擴大し、且つ有力ならしめた。——之を要するに依て事實には統一的結合が存し、人類の發展は常に繼續してゐるといふことが認識されるに至つた。尤も漸く十分な自覺を以てこの發展史觀の立場を取り得るに至つたのはこの一世紀以來のことである。

然しこの史觀の爲めに先きの史觀の階段が全く無能となり、不用となつたと考へられべきではないことを一言して置く。かの階段を支配して居る趣味は人間として一般的に存在するが故に、之を満足せしむることは經驗上必要なものとして残つてゐる。如何なる時代に於ても物語的及び教訓的趣味に相當する作物のあるべきことは正當に必要である。實にその材料はそれぞれ隨意な觀察法を以て自由に取扱はれ得る。例へば歴史的人物の傳記などは純粹に物語として取扱はれ得る。即ち其人の運命及び事業を智識的價值あるものとして出來得るだけ面白く物語り、是以上進んで其教訓關係や、發展關係などに及ばずとも更に差支へはないのである、然しまた之を教訓的にも取扱ひ得られる。即ち其生活及び事業をば愛國、道德及び宗教心の先例として記述し、この論點から競争及び戦争



の動機を研究し記述することも出来るのである。又最後にかゝる人物の生活史を發展的にも取扱ひ得る。即ち其人  
が其時代及び總ての周圍の狀態と關係とによりて、如何にしてかくの如きものとなつたか、また其範圍の前後の仕  
事と關係して何をなし、何を意味するかを研究することも出来る。若しくは他の例を取つて見ると、ミュンヘンの  
王立科學會の歴史部が出版するドイツ帝國年鑑 *Jahrbuch des deutschen Reichs* は吾人の知れる年々の事件を列舉し、  
中世の王家の歴史をば根本的に物語的形式を以て取扱ふて居り、ウエー・フォン・ギーゼブレヒトのドイツ皇帝時  
代史 *W. von Giesbrecht—Geschichte der deutschen Kaiserzeit* は其史料を全然教訓的に取扱うて居り、其第一段の序文の  
中に、皇帝時代はドイツ民族が統一されて鞏固な時代であり、教訓を與へ、先例を與ふる時期であるから、此書は  
ドイツの讀者の心情の上に最も永續的な感化を與ふべきものであるといふて居り、實にこの傾向が全卷を通して現  
はれて居る。併してカルル ラムブレヒト *Karl Lamprecht* は紀元一八九一年に出した「ドイツ史」に於てドイツ中世  
の歴史を發展的形式を以て記して居る。又此等の種々な取扱方を別として、發展の觀察による完全な作物には其作  
物中に總てかの趣味が幾分満足さるべきで、物語的階段の純粹に材料的な、また美的な趣味は材料の遺漏なき復舊  
及び興味ある成形的敘述によつて現はされ——何人もジョーベルの立派な「革命時代史」*Symbol-Geschichte der Revoluti-  
onszeit 1789—1796* に於ては、外的經過をば非常に戲的な興味を以て詳述する趣味を無視してゐるとは感じ得ない——  
——また教訓的なものが心理的及び物語的狀態によつて事件及び人物を明白に立證することによつて現はされる。  
然し殊に發展的論點はその作物の全觀察及び計畫の標準となり、常にその作物を支配するのである。

實に今日は發展史觀が原則上承認されてゐるのであるが、また平均に應用されては居らず、十分自分のものとな  
つて居らない。かゝる發展的取扱は表面上繼續的であつて、聯絡せる發展を示してゐる材料、殊に精神的動作の歴  
史、即ち哲學史、技術史、教會史、教義史などに用ひられ、此等の方面では他の取扱方は既に古びて科學的要求に  
應じ得ないものと考へられる。然し他の範圍、殊に政治史に於てはこの程度を遙かに下つて、其研究及び記述がと  
かく偏見的論點に支配され易い。今日の歴史記述の種類及び問題の不明瞭な根源は、既に新しい史觀が史學の一切  
を捕へてゐるに拘らず、半ば先きの古い史觀の傳統に固着してゐる所に存するのである。

今此處には一般に史學が其研究及び其方法の最も地味な細事に至るまで、悉く總觀察の論點に従屬するといふこ  
とに關して十分に説明する餘地はないが、然しこゝに之を力説して置かねばならない。概して總觀察上必要な問題  
は、吾人が材料について何を知るべき値あるものとして考ふるか、それから何を知らんとするかであるといふこと  
を考ふれば之が非常に明白となる。明かに吾人の研究の題目、方法、目的はこの問題に關係してゐるのである。總て  
の點に關しては個細に證明することゝする。例へば觀察範圍の限界については、歴史が物語的階段にある間は、只  
外的に明瞭な事件及び關係を顧み、教訓的となると、内的な、心理的な事實が勢力を示し來り、最後に發展的な  
ると、内的及び外的の事實が注意されることゝなる。最初の場合には只利害關係を有する民族のみを研究し、第二の  
場合は現在にとりて必要なものを研究し、最後の場合は總ての民族を大なる人類社會の分枝として研究するのであ  
り、この論點よりして眞の萬國史が成立する。史料の圍内についていへば、古代及び中世に在つては史料は口碑及  
び文字的報告に盡き、多くとも文書、記念物が用ひられる位であり。この時代に民謡及び童謡、稅表及び收納簿、  
貨幣及び鑄等を史料として觀察し、之を蒐集し、謄寫し或は模寫し、また之を歴史認識上價值あるものとするが如  
きは何人も思ひつかない所である。併して種々なる史料が愈々益々十分に利用さるゝと共に、自然正確な考證の成  
立を伴うてくる。かくて研究の方法も直接に總觀察の位置と關係して居る。主として束縛的な物語を目的としてゐ

る間は、事實の絶對的正當とか、事實の多樣及び特徴とかは問題がなく、教訓主義が有力な間は、ある傾向によつて規定される風があるが、發展的となると、科學的認識、即ち其れ自體の爲めの絶對趣味となる。この發展階段に入ると考證其物が變じ來りて、例へば稿本 *Codices Manuscript* の本文及び傳來の歴史を基礎とした本文考證 *Textkritik* となつた。吾人は更に第三章第二節に述ぶが如くに、表面上非常に從屬的な外的要件である年代的區分ですらも、總觀察の階段と重大な關係を有し、又實に構造及び文體すらも之に從屬して居るものである。